

2020年7月26日 久宝教会 聖霊降臨節第9主日礼拝

メッセージ「嵐の中でも、共にいる神様」

牛田 匡 牧師

聖書 使徒言行録 27章 33-44節

今朝初めに歌った賛美歌 451 番「くすしきみ恵み」は、「アメイジング・グレイス」という英語の名前で記憶されている方も多いかもかもしれません。日本では「教会で」と言うよりも、1970年代頃からテレビのコマーシャルなどで流された影響で、広く知られるようになったのだそうです。私たちの教会では、2年前に天に召された吉成さんがお好きだった賛美歌として、その葬儀の際にも、流されていたかと思います。

この賛美歌の作者は、左上に書いてありますが、ジョン・ニュートンという18世紀のイギリスの賛美歌作者・牧師です。彼は船乗りの子どもとしてロンドンに生まれました。父親は船乗りとして家を留守にしている期間も長かったことと思いますが、そんな子どもたちを世話していた母親も、彼が6歳の時に亡くなってしまいます。幼くして母と別れた子どもたちは、きっと大変だったことでしょう。彼は11歳になった時、父と同じ船に乗り込み、海の男たちの間で、かなりすきんだ生活を送ったのだそうです。やがて父親とも仲違いして、その船を飛び出し、次々と乗る船を変えますが、いずれも長続きせず、やがて奴隷船の船員となりました。

彼が23歳の時、その船が大嵐に遭い、荒れ狂う海の上で彼は死に直面して回心を経験したと言われています。これは想像ですが、大嵐の中で「このままでは死んでしまいます。神様助けてください。沢山の罪を犯してきた今までの生き方を悔い改めます。もうお金も何も要りません。もし命を助けて頂いたら、神様のために生きます」……。きつとこのような祈りを捧げたのではないかと想像します。彼は九死に一生を得て、その後、船乗りを辞め、伝道者を目指して神学校に入りますが、実際に牧師となったのは、それから16年後、彼が39歳の時でした。そして彼は生涯、教会の牧師を勤めながら、何百曲もの賛美歌を作ったそうです。

それらの中でも、この451番は彼の信仰的な自伝とも言える歌になっています。「私のように道を踏み外した者でも、神様は救って下さった。何という驚くべきみ恵みだろうか」という歌い出しです。この歌はイギリスでは、とりたてて彼の代表作として歌われていたわけではありませんでしたが、スコットランドやアイルランドからアメリカへ移民として渡って行った農民たちが、自分たちの民謡に合わせて好んで歌い、後にそれが賛美歌集に収められて、今日まで歌い継が

れて来ています。

「嵐の中での回心」「嵐の中での神様との出会い」……。それはこのジョン・ニュートンだけではなく、聖書に記されている大昔から人々が経験して来たことでした。穏やかな時には沢山の海の幸をもたらしてくれる海が、一たび嵐となると人の手には負えない脅威となって、人々に牙を向いてくる……。船乗りたちや海辺に住む人たちは、何人もその海の犠牲となって行ったことでしょう。その度に人々は「何故こんな大嵐が起きたのか」「何故こんなにも甚大な被害に遭ったのか」と問うて来ました。それがヘブライ語聖書に記されている、神が人間の悪を罰して洪水を起こしたという「ノアの洪水の物語」（創世記 7-9 章）であったり、「誰のせいで嵐が起きたのか」「私が神様に背いたからです。私を海に投げ込んで下さい」という「ヨナの物語」（ヨナ 1 章）であったりしたわけです。

福音書においても、「嵐」は「不信仰」とセットで記されていて、ガリラヤ湖で嵐にうろたえる弟子たちに、イエス様は「どうして怖がるのか」と言われています（マルコ 4 章並行）。しかし、実際には嵐の中では、信仰があっても無くても、怖いものは怖い。「怖くない」と言う方が嘘になるのではないかと思います。けれども、そこで諦めてしまうのではなく、「助けてください」というお願いであっても、「どうしてですか」という文句であっても、そのような祈りを祈る対象がある、ということが、「絶望に終わらない希望」へとつながっているのではないのでしょうか。

今日の聖書の物語は、使徒パウロの難船のお話でした。週報には聖書地図も掲載していますが、パウロは船で地中海の各地を船で何度も旅して、最後にユダヤからイタリアのローマへと旅しています。それも単なる旅行ではなく、ローマ皇帝への上訴のためでした（使徒 25 章）。そもそもパウロは、エルサレムの町での伝道の際、反対派の人々と衝突し、町に動乱を起こしているという理由で逮捕されましたが（21 章）、生まれながらにローマの市民権を持つパウロには皇帝に上訴する権利がありました（22 章）。そして、彼がそれを求めたために、ユダヤの総督であったフェストゥスは、彼を他の囚人らと一緒にローマまで送り届けるように百人隊長に命じて、パウロらに乗せた船は、シドンの港から出港しました（27 章）。

地図を見ても分かるように、ユダヤからローマまでは数千キロも離れています。ましてや飛行機もエンジンもない、古代の帆船による船旅です。思い通りにスムーズに進むはずはありませんでした。「使徒言行録」27 章では、クレタ島に来た時に暴風に襲われ、進むことが出来なくなり、カウダという小島のそばに来てから、船は流されるままに漂流を始めたと言われています。人々は船を軽くして転

覆を防ぐために、大切な積み荷を海に捨て始めたとも記されています。幾日もの間、太陽も星も見えず、嵐が激しく吹きすさび、食事のままならない状態が長く続いた末に、先程読んだ 33 節となります。

夜の中に船が段々と浅瀬に近づいていることが分かり、「このままでは暗礁に乗り上げ座礁してしまう、早く夜が明けて欲しい」と人々が言っている時に、パウロが皆に言ったのは、「生き延びるために、どうぞ何か食べてください」ということでした。そして彼は自らパンを取って、それを裂き、皆を励まして、共に食事をしました。その後、人々は船を少しでも軽くして、座礁を防ぐために食料の穀物をも海に投げ捨てましたが、朝になってから、船はどこかの島の浅瀬に乗り上げました。「激しい波で船尾が壊れだした」とありますから、波風はまだまだ激しかったのでしょうし、座礁した際の衝撃もとても大きかったのでしょう。そのような大変な状況の中でも、囚人たちも兵士たちも、船員たちも、混乱に乗じて虐殺が起きることもなく、全員が無事に上陸することができました。

次の 28 章で、この島がマルタという島であるということが書かれていますが、地図を見るとマルタ島はイタリアの下にありますから、かなりの距離を流されたということが分かります。2 週間もの間、嵐の海を漂流し続けるというのは、生きた心地がしなかったことと思えますが、そのような中でもパウロは希望を失いませんでした。22 節では人々に対して「元気を出しなさい。船は失うが、誰一人として命を失う者はありません」と語っています。なぜなら、自分が神様から与えられたローマ皇帝に上訴するという使命を、神様は実現して下さると信じているからだ、というわけでした。事実、船は座礁して難破しましたが、276 人もの人々は全員が助かりました。そしてマルタ島で数カ月を過ごした後、別の船に乗ってパウロたちは目的地であるローマへと到着して行きました。

さて、このお話は今を生きる私たちに何を語っているのでしょうか。単に「パウロの旅は、大変な旅だった」というだけでしょうか。大昔のことですから、旅には危険が付き物でした。船が難破した経験も、この 1 回だけではなく、「難船したことが三度、一昼夜海上を漂ったことも」(2 コリント 11 : 25) あったようです。そのような時、彼はどこに神様を見ていたのでしょうか。自分は神様から見放されて、罰として今この困難な状況にある、とっていたのでしょうか。いや、むしろ彼はそのような困難、嵐、苦しみの中に、そこに自分たちと共にいて下さって、自分たちに力を与えて、支えて下さっている神様を見ていたのだと思います。なぜなら、神様の力は、私たちの弱さの中に働くからです (2 コリント 12 : 9)。

私たちは目的地に向かうために、船に乗ります。そして小さくて盛んに揺れる船よりは、大きな船の方が、どっしりとしていてあまり揺れずに安心したりします。しかし、ふと気付くと、当初の目的地へ向かうということを忘れて、その船

に乗っていること自体を、目的であるかのように勘違いしてしまっていることはないでしょうか。もしもそう思い込んでしまっていたら、船を離れることが出来ずに、嵐の中で船と一緒に転覆してしまいます。大切なことは、「船は失っても、命は失わない。神様から与えられている使命を果たすために、生き延びる」ということではないでしょうか。

キリスト教の伝統の中では、教会は「船」にたとえられて来ました。時に嵐に襲われることもあるこの世の大海原を、神の国という目的地を目指して進んで行く教会という船……というわけです。また別の例で言えば、私たちに与えられている日々の働き、なすべき仕事もまた、私たちの人生における「船」だと言えるのではないかと思います。しかし、「船」は飽くまでも目的地に向かうための手段であって、目的そのものではありません。時には船を失うことがあっても、船を乗り換えることがあっても、当然だと思います。

嵐の中にあっても、絶望してしまわないで、「元気を出しなさい。船は失っても、命は失わない」「生き延びるために必要だから、何か食べてください」という言葉を信じて、食事をとること、今できること、今なすべき身近なことに取り組むこと……。その時、私たちはそこに共にいて、私たちを支え、励まし、力付けて下さっている神様を見るのではないのでしょうか。

新型コロナウイルスの感染者数が、全国で日に日に増えています。世界と比べると日本の検査数はまだまだ少ないので、実際にはもっともっと多くの方が、感染していると思われます。そのような状況でも、4月5月とは状況が異なり「緊急事態宣言は出さない」と言われたり、旅行業界を支援するために、1.1兆円もの予算で「Go To トラベル・キャンペーン」が行われたりしています。全国民から1万円ずつ税金を徴収して、それを一泊2-4万円もする特定の業者を利用した人にだけ還付するというキャンペーンですから、このコロナの嵐の中で、船の舵取りをする人々が、どこの誰を見ていて、誰を見ていないかは明らかです。他方、医療現場、介護福祉現場、また豪雨の被災地には、疲弊しきった人々が立ち尽くしています。もう国やお上という船に固執せずに、自らが周りの人々と共に生き延びる道を探す時に来ているのではないかと思います。

嵐の中でも、神様は私たちと共にいて下さいます。まずは今日を生き延びるために、共に食事をする事へと、そしてまた目的地を目指して、目の前にある身近な一つ一つのことに取り組む事へと、私たちは今日も「嵐の中でも、共にいて下さる神様」から招かれています。